わたしの三つ星

「馬鹿野郎騒動記」　こやたか志緒著

男女児童の本気のけんか

本気で男女がけんかできるのは小学３年生ごろまでだろう。ふとしたきっかけで男の子と女の子の〝いさかい〟が始まった。腕力差はあるので、通りすがりの大人を盾にし、裏をかいて男の子の待ち伏せをかわすなど、女の子たちの出す知恵が面白い。

表紙は、下校中におかっぱ頭の女の子たちが、いがぐり頭の男の子に石をぶつけている著者の絵だ。終戦からあまり年月がたっていない田舎の風景そのもので、本書の中身を十分伝えている。後半で、いさかいをした男の子たちと、６人の女の子たちのその後の人生を重く軽く伝える。けんか相手で指揮をとっていた男の子は養子先で自死していた。あのとき闘った女の子同士の結束は何年たっても存在する。

その後の経済成長によって村の人口は減り、開墾した段々畑は雑木林、竹林に戻っているという。本書を書いているときに後期高齢者になったという著者は絵も熊本弁の文章もうまい。　（文芸社・1080円）

＝長谷川博（61）熊本市